

## 短期大学における「アメリカの文化」教授法 に関する一考察

吉田かよ子

### 1. はじめに—北海道における「アメリカ研究」—

日本では、「アメリカ研究」(American Studies)は、1962年に津田塾大学英文学科の中にアメリカ研究専攻コースが置かれたのが始まりとされ、教育研究の分野としての歴史はいまだ30年に満たない。

北海道においては、1974年に北海道大学に「地域研究—アメリカ」の名で、社会科学特別講義として開講されたのが最初である。<sup>(1)</sup>文系4学部(文・法・経・教育)の教官によるteam-teachingの形態をとる学際的(interdisciplinary)な試みとして、一年目文類学生を対象として実施された。

講義の共通テーマは、「アメリカ国民性の研究」「アメリカ文化の特徴」「アメリカ人の性格」などが年毎に設定され、この基本テーマに沿って、4部門の教官が講義を行う形であった。当初3年間の講義内容は以下のようになっている。<sup>(2)</sup>

- 1 週—アメリカ研究とは(オリエンテーション)—(文学部担当教官)
- 2—4 週—アメリカの政治・法制度—(法学部担当教官)
- 5—7 週—アメリカ経済の構造と経済政策思想—(経済学部担当教官)
- 8—10 週—アメリカの経営風土と労働—(教育学部担当教官)
- 11—13 週—アメリカの文学と思想—(文学部担当教官)
- 14 週—討論と研究指導—(全担当者)
- 15 週—総括(シンポジウム)—(全担当者)

こうして産声をあげた北海道のアメリカ研究は、その後、1981年には札幌学院大学人文学部英語英文学科に「アメリカ研究」科目群としてカリキュラム配列がなされ、道内の4年制大学英文学科としては初めて、本格的なアメリカ研究専攻コースが設置されるに至った。

こうした大学でのアメリカ研究講座の開講と並行して、研究者の組織化が進み、1974年10月に北海道アメリカ学会が発足した。北海道アメリカ学

会は、1980年より毎年夏に1週間におよび「アメリカ研究札幌クールセミナー」（以下、札幌セミナーと略す。）を開催し、北海道のみならず日本におけるアメリカ研究振興の先導的役割を果たすこととなった。1990年夏で11回を数えた札幌セミナーは、文学、政治、経済の3部門からなり、年毎に設定される共通テーマに沿って、各々3分野における第一人者をアメリカより招へいし、日本国内、およびアジア各国からの研究者約100名の参加を得て開催する形態をとっている。

昨年までのテーマを見ると、80年「ハイフン付きアメリカニズム」、81年「アメリカ人のヨーロッパ像」、82年「アメリカにおける地域的特性と全国的統一」、83年「戦争とアメリカ社会」、84年「変貌するアメリカの家族」、85年「アメリカの都市—過去から未来へ」、86年「アメリカの知識人—その意味するもの」、87年「アメリカ憲法の神話と現実」、88年「階級意識とアメリカ社会」、89年「アメリカの宗教」、90年「アメリカの教育」と、アメリカ文化の様々な側面を取り上げ、諸学相関のアメリカ研究の存在意義を高めるのに寄与している。また、札幌セミナーの報告が、毎年単行本として刊行されていることは、セミナーの高い質的水準の持続性を示すものであることを付記しておきたい。<sup>3)</sup>

このような北海道におけるアメリカ研究の発展には、北星学園も積極的役割を担っている。札幌セミナー第1回目より、当時北星短大の大山綱夫氏（現恵泉女学院短大教授）が実行委員を勤め、その後北星学園大学の矢口以文教授も実行委員に名を連ねた。また、北海道大学における講座開講の推進者の一人である経済学部石垣博美教授も、退官後北星学園大学に転じられ、石垣教授のもとで、1989年には札幌セミナーははじめて北海道大学を離れて北星学園大学で開催された。

このような状況のもとで、北星学園女子短期大学（以下、北星短大と略す。）でも1979年度より、英文学科の英米文化系科目として「アメリカの文化」が開講された。

アメリカ研究は当初から、伝統的な学問分野と異なり、確立された方法論を持たず、多様なアプローチが試みられてきた。北海道においては、これまで述べてきたように、「総合研究としてのアメリカ研究」のアプローチがとられてきた。これは、「一人の研究家が複数の学問方法を駆使し、或いは複数の専門家が協力し、アメリカ文化に関する単一のテーマを研究

## 短期大学における「アメリカの文化」教授法に関する一考察

し、その論議を集約して総合的な研究・教育を行う」<sup>(4)</sup>のもであり、それも、後者の複数の専門家の協力によるテーマ別研究を行う形式が主流であった。北星短大の「アメリカの文化」も、こうした方向に則した形でカリキュラム開発がなされてきた。

(注・参考文献)

- (1) 鈴木重吉、「北海道における『アメリカ研究』」、札幌学院大学人文学部紀要、第36号、1984.12. pp.8-11.
- (2) 石垣博美、et.al., 「総合講義 アメリカ」、1979.pp.22-23.
- (3) 1988年の「階級意識とアメリカ社会」までの計9集は、木鐸社より上記の表題で出版されている。
- (4) 「総合講義 アメリカ」 p.11.

### 2. 北星短大における「アメリカの文化」のカリキュラム開発

北星短大における「アメリカの文化」は、1979年から1982年までは、半期2単位、1983年度より通年4単位の必修科目となった。開講以来、88年までの10年間の講義要綱を見ると、1. で述べたような北海道におけるこの分野の研究・教育の特徴を積極的に取り入れていることがわかる。

すなわち、(1) 総合講義の形式をとること。(2) 地域研究の方法をとること、である。(1)は、「学内、学外からの数人の講師が主として政治、経済、社会などの社会科学、及び宗教、文学、芸術などの人文科学、その他教育などの分野からそれぞれの専門に基づき、テーマ別に講義をすすめる」ことであり、(2)は、「一般的には「アメリカ研究」あるいは「アメリカ学」(American Studies)と呼ばれている研究方法を用い、アメリカの社会、文化の歴史と現状を総合的に、また多面的に学ぶ」こと、と定義されている。<sup>(5)</sup>

1987年度の講義スケジュールは、以下のようになっている。

1. アメリカ概観 (担当教員)
2. アメリカの政治と社会 (北大・法学部教員)
3. アメリカの経済と社会 (北大・経済学部教員)
4. アメリカの女性と家族 (アメリカンセンター職員、アメリカの大学よりの講師)

5. アメリカのFine Art (北星短大教員)
6. アメリカ小説について (北星短大教員)
7. アメリカの宗教 (担当教員)
8. アメリカの教育 (北星大学教官)
9. アメリカに関するVTR・film他

年間講義の最初と最後を専任教員が担当し、その他は、それぞれの専門分野の研究者が、与えられたテーマに沿って数回講義を受け持つ形態である。この形式では、担当教員が継続的に学生にガイダンスを与えたとしても、北海道大学などで実施されたteam-reachingとは異なり、担当者間の横の連絡協議の機会もなかったこともあって、講義内容に統一的枠組みが欠けていたきらいがあることは否めない事実であろう。

1989年度に筆者が着任した際、そうしたカリキュラム構成上の問題点を解消する目的もあって、基本的には専任教員一人で通年講義をすることが了解事項となった。週1回90分の30講という限定された時間内で、できるだけ幅広くアメリカを知識として吸収させるには、総合的にアメリカの文化および社会を網羅したテキストの選定が最重要課題となった。また、英文学科内の講座として、テキストは原書とし、学生の英語力向上も同時に目標とする狙いもあった。

(注・参考文献)

(5) 北星学園女子短期大学 1988年度講義要綱 pp.29-30.

### 3. MAKING AMERICA:THE SOCIETY AND CULTURE OF THE UNITED STATES

日本における一般的な大学・短大用教材の中には、上記の要求を満たすものは見当たらなかった。内容が表面的にすぎたり、ある狭い範囲に限定されていたりして、筆者の意図する内容の、適当なアメリカ入門書は得難いことを理解せざるを得なかった。

幸い、札幌アメリカン・センターを通じて、米国広報・文化交流庁(USIA)がアメリカ研究振興に寄与する目的で編纂したMAKING AMERICA:THE SOCIETY AND CULTURE OF THE UNITED

STATES (以下、MAKING AMERICA、と略す。)を文化コースの学生全員分、入手することができた。

MAKING AMERICAは、米国の地理、歴史、文化、社会、政治、哲学、宗教など、それぞれの分野の第一人者と見なされる23人の研究者によって著された書き下ろし論文からなるアンソロジーの形態をとり、アメリカの生活と文化のほぼすべての側面を網羅している。これらの論文は、内容に則して、4つのパートに分類されている。

すなわち、第一部 アメリカの建国 (BUILDING A NATION)、第二部 アメリカ文化の諸相 (EXPRESSIONS OF AMERICAN CULTURE)、第三部 社会と価値観 (SOCIETY AND VALUES)、第四部 アメリカ思想の多様性 (VARIETIES OF AMERICAN THOUGHT)である。

編者は、南カリフォルニア大学准教授のLuther S. Luedtkeで、全体の序文及び各パートの前書きをものしている。それぞれの筆者によって、英語の難易度はばらつきがあり、短大2年生の英語力とアメリカに関する知識では難解と思われる文章も多かったが、全体の内容の持つ多様性を考慮して、これをテキストとして採用することとした。しかし、400頁に及ぶ膨大な量をすべて講義時間内に読みこなすのは不可能であることから、学生の関心の比較的低い分野であると思われる第四部は省略することにした。

また、教員による一方的な講義形式を避けて、できる限り学生の自主的な学習意欲を高める意図から、コースの学生を無作意に4班に分け、各班にテキストの中から論文1編ずつを研究課題として与え、発表時間を設定することとした。

初年度の1989年には、課題として、1班 アメリカの文化圏 (CULTURAL REGIONS OF AMERICA: 著者Raymond D. Gastil, Director of the Comparative Survey of Freedom), 2班 アメリカ文化における芸術性の欠如 (THE ARTLESSNESS OF AMERICAN CULTURE: 著者Dickran Tashjian, Prof. of Comparative Culture at the Univ. of California), 3班 アメリカの娯楽とマスメディア (ENTERTAINMENT AND THE MASS MEDIA: 著者Norman Corwin, Visiting Prof. of Journalism at the Univ. of Southern California), 4班 アメリカの教育制度 (THE AMERICAN SYSTEM OF EDUCATION: 著者

John B. Orr, Dean of the School of Education, Univ. of Southern California) を与えた。

発表方法は、学生たちの自主判断に委ねた。各グループは与えられた論文の英語を分担して訳した上で、さらに地図や表を作成したり、本、雑誌、VTR等を教室に持ち込んでプレゼンテーションを行った。他班の学生は、発表の内容に従ってレポートを書き、発表内容を個人的に評価することとした。

月に一回を学生の研究発表の時間にあて、他の講義時間には、学生発表の補足と、テキストの論文をほぼ掲載順に筆者が講義をする形態とした。年間に取り上げた論文は、以下の通りである。

- ・ AMERICA'S NATURAL LANDSCAPES by Peirce Lewis, Prof. of Geography at Pennsylvania State Univ.
- ・ FROM IMMIGRATION TO ACCULTURATION by Arthur Mann, Prof. of American History at the Univ. of Chicago
- ・ THE FRONTIER FAMILY : Dislocation and the American Experience by Lillian Schlissel, Prof. of English at Brooklyn College of the City Univ. of New York

以上はすべてMaking Americaの第一部掲載のものであり、時間的制約から、社会問題、特にアメリカの女性と職業や家族の問題、に関しては、テキストを離れて講義を行った。またアメリカの政治に関しては、北海道大学法学部の古矢旬助教授（当時、現教授）に、2回にわたって、アメリカの政治機構及びアメリカ憲法に関する講義をご担当いただいた。

学生の研究発表と並んで「アメリカの文化」のもう一つの特徴としたかったのは、札幌の中で、本物のアメリカに接する機会をできるだけ学生に与えることであった。前期のはじめに、札幌アメリカン・センター図書館で、クラス全員にグリーンングを受けさせ、研究発表のための資料収集の方法を会得させた。また後期には、アメリカの芸術に関する学生発表の後に、北海道立近代美術館の特別展の「アンディー・ウォーホール遺作展CARS」を見学にでかけた。その際、美術館学芸員よりアメリカの現代絵画についての講義を受けた。次年度末に実施したアンケート調査の結果をみると、こうした学外活動は学生におしなべて評価が高い。

また、講義の中にできるだけVTRを取り入れ、視覚的にアメリカ文化

および社会の理解を深めさせるような工夫も試みた。

終講後の反省としては、初年度ということで、あまりに多くの分野を性急にカバーしたために、学生が十分に個々の課題を消化できなかったのではないか、という点があった。また、明かな欠点と思えたのは、学生の研究発表を前期2回、後期2回に分散したことであった。短期大学の場合、2年生の後期に入ると学生の就職活動による欠席が増え、グループによる発表に障害が生じた。こうした反省材料を基に、修正を加えて開講したのが、1990年度の「アメリカの文化」である。

#### 4. 1990年度の「アメリカの文化」

初年度の基本的なコースデザインを変更することなく、次のような修正を加えて実施したのが、1990年度の「アメリカの文化」である。まず、学生の研究発表はすべて前期で終了するような日程とした。そして、学生の就職活動のための欠席が最も顕著となる9月は、芸術月間として、前期の発表に関連し、その知識の補強をはかる目的で、VTR鑑賞や、美術館におけるアメリカ美術鑑賞にあてることとした。

また、講義内容に関しては、時間的制約を配慮して、文化をより狭義に解釈して、芸術・文化の側面に重点をおき、社会や政治的枠組みに関する部分はかなりの部分削除せざるをえないという結論に達した。そのため、研究発表の内容もできるだけ均質にするために、前年度の課題の一つであった「アメリカの教育制度」を、「アメリカのスポーツ」(Sports and American Culture: 著者 Richard G. Powers, Prof. of American Studies at the City Univ. of New York)に変更して実施した。

それぞれの発表の翌週は、教員による補足説明およびテキストのリーディングに充て、内容の理解徹底を図った。他班の学生たちにはレポート提出を義務づけた。発表、レポート共に、めざましい工夫の跡がみられた。また、発表者の中から特に徹底調査を行った学生については、後期にそれをまとめさせ、学生教育研究発表第1号に掲載した。<sup>6)</sup>

9月の芸術月間には、ジャズ、および映画をVTRで鑑賞した後、<sup>7)</sup>学外学習で前年に続いて道立近代美術館に出かけ、アンドリュウ・ワイエスの「ヘルガ」展をクラス全員で鑑賞し、学芸員より別室で講義を受けた。

10月からは、通常の講義に戻り、「アメリカの教育制度」に関しては、

再び班単位で翻訳する作業としたが、あまりに細分化したために分担箇所だけを読んでも全体の意味が把握できず、結果的には、各班共に、満足のいくものとはならなかった。しかし、学生には、日本と比較してアメリカの教育制度の関心をもつ者が多く、学年末の自由研究のレポートには、6人がアメリカの、特に高等教育機関の内容、歴史、学生生活などをとりあげている。

後期で特筆しておきたいことは、アメリカ移民史の講義の後で、吉田ゼミの梅本雅子、斉藤理美両嬢が、「アメリカの文化」のクラスに出向いて、1892年当時のニューヨーク湾エリス島に設けられたヨーロッパからの移民通関所の様子を人形劇の形で再現してくれたことである。これは、アメリカの都市史に関するゼミで講読していたテキストから、二人がセリフ劇として創作した優れた作品であった。<sup>(8)</sup>

年度末は、学生一人一人が自由に選択した課題に関するレポートを提出したが、フレデリック・ジャクソン・ターナーのフロンティア理論からコカコーラやリーバイス・ジーンズ、ウォルト・ディズニーなどに見るアメリカの大衆文化の世界への影響力に至るまで、いずれも高い水準の出来であった。また、学生の間で関心が強く、講義の中で取り上げる時間がなかったアメリカ人の日常生活（衣食住を含めて）や、ニューヨーク、ロスアンゼルスなどの特定の都市について、独自にまとめあげたレポートも多く見られた。中には、400字詰原稿用紙50枚以上の力作をまとめた学生も2名いた。

コース評価は基本的に相互評価であるべきであるという筆者の考えもあって、1990年12月の最後の講義時間に、クラスの出席学生全員に無記名で、アンケート調査の形で「アメリカの文化」の評価をさせた。以下はその結果をまとめたものである。

(注・参考文献)

(6) 小松山恵子、「ミンストレル・ショー (Minstrel Show) アメリカ大衆演芸の発達と影」、北星学園女子短期大学学生教育研究発表第1号 1990年、pp.1-3.

(7) “Live at the Village Vanguard,” VTR. 札幌アメリカン・センター所蔵。



## 短期大学における「アメリカの文化」教授法に関する一考察

「チャップリンの独裁者」、VTR. 北星短大AVライブラリー所蔵。

(8) 梅本雅子・斉藤理美、「エリス島物語」、VTR. 北星短大英文学科資料室所蔵。

### 5. 学生による評価結果について

英米文化コース在籍者50名（内1名休学中）の内、当日出席した42名の学生に対して、別添のアンケートを実施した。評価は客観評価と、主観評価に分け、客観評価は5段階で、1が「大変よかった（勉強になった）」、2が「まあまあよかった（勉強になった）」、3が「どちらともいえない」、4が「あまりよくなかった（勉強にならなかった）」、5が「全然よくなかった（勉強にならなかった）」という分類とした。

年間の講義スケジュールに沿って、個別に評価をさせると同時に、4月の段階でこの講座に何を期待したか、また終講時にその期待は叶えられたかを主観評価させた。また講座そのもののありかたに対する提言も書かせた。意見の内容を、以下にまとめた。

### 「アメリカの文化」学年末アンケート

#### 1. あなたは何班でしたか？

1班	10名
2班	11名
3班	11名
4班	10名

#### 2. 4月に講義が始まる前、あなたはアメリカの文化のどのような側面を学びたいと思っていましたか？

・アメリカ国内の地域の特色と、人々の生活および生活習慣、生活文化	14名
・アメリカ文化と日本文化の違い	8名
・アメリカの芸術（絵画、音楽、映画など）	6名
・アメリカの教育制度	5名
・文化を通して人間（アメリカ人の価値観、人間性）を学ぶ	4名
・アメリカの娯楽	3名
・アメリカの歴史的側面	2名

吉 田 かよ子

- |                           |    |
|---------------------------|----|
| ・日本人の知らないアメリカ             | 2名 |
| ・アメリカの社会構造、社会問題（青少年の問題など） | 2名 |
| ・アメリカの自然                  | 1名 |
| ・アメリカのスポーツ                | 1名 |

などが、挙げられていた。

〔前期〕

3. アメリカン・センター図書館の見学について。

- |                |           |
|----------------|-----------|
| 1 大変勉強になった     | 8名 (19%)  |
| 2 まあまあ勉強になった   | 13名 (31%) |
| 3 どちらとも言えない    | 18名 (43%) |
| 4 あまり勉強にならなかった | 2名 (5%)   |
| 5 全然勉強にならなかった  | 1名 (2%)   |
| 未記入            | 1名 (2%)   |

(1または2と答えた人のみ)

どのように役立ったか下を書いて下さい。

- ・ビデオでアメリカに触れられた。
- ・こういう施設があることを知ってよかった。
- ・卒業後も、アメリカについて調べたい時利用できる。
- ・その後、研究発表の時利用した。
- ・あれだけの資料があることが、新鮮な感動だった。
- ・(存在を知ることによって、その後開催された) アメリカン・スクリーンプリント展に行けてよかった。
- ・(自分の分担の) 研究資料がほとんどなく残念だった。
- ・留学に関する情報 (TOEFL、学習方法) を入手することができた。
- ・英語の本ばかりで、英語の苦手な私にはあまり役に立たなかった。

などのコメントがあった。

4. 「アメリカの地理と自然」について。

- |                |           |
|----------------|-----------|
| 1 大変勉強になった     | 13名 (31%) |
| 2 まあまあ勉強になった   | 18名 (43%) |
| 3 どちらとも言えない    | 6名 (14%)  |
| 4 あまり勉強にならなかった | 3名 (7%)   |
| 5 全然勉強にならなかった  | 1名 (2%)   |

短期大学における「アメリカの文化」教授法に関する一考察

未記入 1名(2%)

その他コメントがあれば書いて下さい。

- ・それほどメジャーではない州のことなども知ることができた。
- ・アメリカの地理や自然については、全く知識や関心がなかったが、やってみるとけっこうおもしろかった。
- ・気候などに興味があったので、勉強になった。
- ・アメリカの州、地域は、その歴史や地理的背景によって特徴づけられていて、州の一つ一つがひとつの国家を成り立たせているように感じた。
- ・もう少し黒板を使って説明してほしかった。
- ・日本と比較してアメリカの国土の広大さを理解した。
- ・地理的關係から、現在のアメリカがあることを納得させられた。
- ・地図を使って勉強したのがよかった。
- ・予備知識が十分ではなかったので、もう少し時間をかけてほしかった。
- ・アメリカ人を知るには、その地理と自然は切っても切れない関係にあると思った。この講義は大切だなと思った。

以上のような意見が寄せられた。

5. 学生の研究発表について。

a) 四つの班にわかれたのは・・・

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1 大変よかった    | 22名 (52%) |
| 2 まあまあよかった  | 17名 (41%) |
| 3 どちらとも言えない | 2名 (5%)   |
| 4 あまりよくなかった | 1名 (2%)   |
| 5 全然よくなかった  |           |

b) それぞれの班に割り当てられたテーマは・・・

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1 大変よかった    | 17名 (40%) |
| 2 まあまあよかった  | 21名 (50%) |
| 3 どちらとも言えない | 2名 (5%)   |
| 4 あまりよくなかった | 2名 (5%)   |
| 5 全然よくなかった  |           |

c) 分量的には・・・

1 大変よかった	7名 (17%)
2 まあまあよかった	26名 (62%)
3 どちらとも言えない	6名 (14%)
4 あまりよくなかった	2名 (5%)
5 全然よくなかった	1名 (2%)

d) 各々の発表についてレポートを書いたのは・・・

1 大変よかった	10名 (24%)
2 まあまあよかった	18名 (43%)
3 どちらとも言えない	12名 (29%)
4 あまりよくなかった	1名 (2%)
5 全然よくなかった	1名 (2%)

e) どの班の発表が一番よかったと思いますか(自分の班もちろん含めて)

1 班	6名 (14%)
2 班	5名 (12%)
3 班	14名 (33%)
4 班	16名 (38%)
未記入	1名 (2%)

f) 自分の分担範囲を調べるのに、どのような参考資料を使用しましたか。

百科事典、美術の本、アメリカについての辞書、現代アメリカ人物カタログ、西洋人名辞典、美術百科事典、西洋史辞典、アメリカの旅行の本、世界文化シリーズ14「アメリカ2」、スーパートリビア事典、アメリカを知る事典、岩波人名辞典、現代スポーツ百科事典などのレファレンス資料に属するものから、「カリフォルニア・レポート」、「ブック・オブ・アメリカ」、「アメリカ絵画の系譜」、「アメリカン・アート」、「ジャズの歴史」、「チャーリー・チャップリン」、「サーカスが来た!」、「アメリカの音楽」、「アメリカ文化の背景」、「アメリカの民衆文化」、「アメリカのスポーツ」、「映画がつくったアメリカ」、「アメリカスポーツの文化史」などアメリカ文化の多様な側面を扱った書籍を使用していることがわかる。

## 短期大学における「アメリカの文化」教授法に関する一考察

g) その参考資料は、どこで見つけましたか？

1 短大図書館	28名 (67%)
2 アメリカン・センター	3名 (7%)
3 書店	0名 (0%)
4 その他 (具体的に)	3名 (区立図書館等) (7%)
未記入	8名 (19%)

参考資料は短大図書館で調べている学生が圧倒的に多いことがわかる。

項目の最後に、学生の研究発表についてのコメントを求めた。様々な意見の中から、代表的なものを各班ごとにまとめてみた。

1班 (アメリカの文化圏) の学生は、最初の発表で、どのようにしてよいかわからず、後の発表を聞いて、自分たちもあのようにすればよかったと思った、という声が多かった。しかし、自分で調べることにより、知識が身につけてよかった、という学生も多い。

2班 (アメリカの芸術) では、皆それぞれよく頑張った、最初は苦痛だったが、結果的にやってよかった、各班に与えられたテーマに差があり、2班は難解だったので、短期間にやるのは大変だった、といった意見が出された。

3班 (アメリカの大衆文化) では、一つのテーマを詳しく調べたことで歴史的なことがわかり、とてもよかった、全員がよく調べてよかった、という意見の反面、分担部分をやってこない人がいて、大変苦労した、グループ活動のむずかしさを実感した、という感想もあった。

4班 (アメリカのスポーツ) では、皆一生懸命やっていたよかったが、発表のしかたを工夫すればよかった、という反省の声もあった。

発表を聞いてレポートをまとめるという作業に関しては、発表者の声が小さかったり、早すぎたりして、うまくノートが取れなかった、という不満の声が圧倒的に多い。マイクを使用するべきだという提案もあった。

しかし、内容に関しては、学生たちのさまざまな努力に対する賞賛の声も多く、一時的には苦痛であったけれども、結果としてよかった、とする感想が多数を占めた。

[後期]

6. 9月の芸術月間について。

・ジャズのVTR鑑賞

1 大変よかった	15名 (36%)
2 まあまあよかった	14名 (33%)
3 どちらとも言えない	8名 (19%)
4 あまりよくなかった	2名 (5%)
5 全然よくなかった	1名 (2%)
未記入	2名 (5%)

・チャップリンの「独裁者」鑑賞

1 大変よかった	26名 (62%)
2 まあまあよかった	15名 (36%)
3 どちらとも言えない	
4 あまりよくなかった	
5 全然よくなかった	
未記入	1名 (2%)

・アンドリュウ・ワイエス展見学

1 大変よかった	33名 (79%)
2 まあまあよかった	5名 (12%)
3 どちらとも言えない	1名 (2%)
4 あまりよくなかった	
5 全然よくなかった	
未記入	3名 (7%)

・全体として

1 大変よかった	27名 (64%)
2 まあまあよかった	15名 (36%)
3 どちらとも言えない	
4 あまりよくなかった	
5 全然よくなかった	

学生のコメントとしては、次のようなものが挙げられていた。

- ・教科書で文字を読むだけでなく、目や耳で文化に触れるこのような企画をもっと増やすべきである。
- ・芸術月間は「アメリカの文化」ならでのプログラムで、充実してい

## 短期大学における「アメリカの文化」教授法に関する一考察

た。

- ・ワイエス展に感動した。美術館見学はためになった。
- ・もっと見学や鑑賞をしたかった。
- ・就職活動の盛んなこの時期を、芸術月間にしたのはよかった。

その他、個別のVTRについての感想2、3あったが、おしなべて、この芸術プログラムは学生に最も好評であり、視覚的な知識吸収を好む現在の学生の姿が浮き彫りにされた形となった。

### 7. 「アメリカの教育」について。

- ・各班にわかれて翻訳したのは・・・

1 大変よかった	15名 (36%)
2 まあまあよかった	16名 (38%)
3 どちらとも言えない	10名 (24%)
4 あまりよくなかった	
5 全然よくなかった	1名 (2%)
- ・おもにアメリカの公教育の歴史と制度を学びましたが、その感想は・・・

1 大変よかった	10名 (24%)
2 まあまあよかった	24名 (57%)
3 どちらとも言えない	5名 (12%)
4 あまりよくなかった	2名 (5%)
5 全然よくなかった	1名 (2%)

学生から寄せられたコメントには、「アメリカの教育の歴史ばかりで少し残念。もっと具体的な事例をやってみたかった。」「教育というアメリカを陰で支える力がこういうところにあったのだ、ということがわかった。最初はあまり興味がなかったが、教育の問題は絶対とりあげるべきだ。」「日本の教育に悲観的だったが、アメリカの教育も決してパーフェクトではないことを改めて理解した。」「学生の間に、こうして他国の教育制度を学んで考える機会があったことを大切に思う。」など、日本の教育と比較しながら考える学生が目立った。しかし、翻訳作業に関しては、分担箇所が短かったために、発表者も、聞く側も、前後の関連をよく把握できなかった、という意見が多かった。

### 8. 「移民の国アメリカと移民の同化のプロセス」について。

- ・講義の内容は・・・

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1 大変よかった    | 13名 (31%) |
| 2 まあまあよかった  | 18名 (43%) |
| 3 どちらとも言えない | 10名 (24%) |
| 4 あまりよくなかった | 1名 (2%)   |
| 5 全然よくなかった  |           |
- ・梅本・斉藤両嬢による「エリス島物語」は・・・
- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1 大変よかった    | 17名 (40%) |
| 2 まあまあよかった  | 16名 (38%) |
| 3 どちらとも言えない | 4名 (10%)  |
| 4 あまりよくなかった |           |
| 5 全然よくなかった  |           |
- 未記入 5名 (12%)

コメントの多くは、両学生の演技の巧みさを賞賛したもので、教育テレビの子ども番組を見ているようだ、というものも2名いた。また、「このような企画でドラマのように学ぶと一生忘れない」という学生もいた。移民の国アメリカを、劇化することによって、より印象づけようとしたわけだが、中にはそうした意図が理解できない学生もいたことを付記しておく。

#### 9. 「アメリカの女性と職業」について。

講義の内容は・・・

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 1 大変よかった    | 20名 (48%) |
| 2 まあまあよかった  | 18名 (42%) |
| 3 どちらとも言えない | 4名 (10%)  |
| 4 あまりよくなかった |           |
| 5 全然よくなかった  |           |

就職を控えていることもあって、このテーマには関心が高かった。常に日本の働く女性の状況と比較して、アメリカの女性の職業との関わりを理解しようとした学生が多かったのが、コメントからも読み取れた。

10. 一年間アメリカの文化を学んで、あなたの質問2. で希望していたことはかなえられたでしょうか？

- |              |           |
|--------------|-----------|
| 1 十分かなえられた   | 12名 (28%) |
| 2 まあまあかなえられた | 20名 (48%) |
| 3 どちらとも言えない  | 4名 (10%)  |



## 短期大学における「アメリカの文化」教授法に関する一考察

4	あまりかなえられなかった	4名(10%)
5	全然かなえられなかった	1名(2%)
	未記入	1名(2%)

11. 今年の学生のために、「アメリカの文化」に対する提言、意見など(こんなことをやってみたかった、等)がありましたら書いて下さい。

この設問に対しては、様々な解答が寄せられたので、似たようなコメントはまとめて、次に示した。講義内容に関するものと、講義の展開方法に関するものに大別できる。

「講義内容に関しては」

- ・国としての文化を学んだが、人間的な文化の面をもっと学びたかった。
- ・できれば、もう少しアメリカ人の普段の生活について学びたかった。
- ・アメリカの文化に触れさせる機会を今後も増やしてほしい。アメリカは単なる一国ではなく、さまざまな国の文化のミックスされた偉大な国であることを教えてほしい。
- ・アメリカの若者の実態(私たちと同年代の)やアメリカ人の日常生活、行事等も学びたかった。
- ・「アメリカの女性と職業」をもう少し早い時期にやるとよい。
- ・もっと現実的に、現在のアメリカについての講義があってもよかったのではないか。
- ・日本人とアメリカ人の日常生活の違いや、日本似はないアメリカの行事などを学べると楽しいと思う。
- ・生活文化、地域の特色なども勉強したかった。

等の意見が寄せられた。

「講義の展開方法に関しては」

- ・レポートの量を3分2程度に減らし、芸術鑑賞を増やすとよい。
- ・グループ発表はぜひ続けるべきだ。グループ発表によって、多くの人と知りあうことができた。
- ・徹底討論のようなものがあってもよい。
- ・前期のように自分たちで何かを調べて発表する機会を増やすべきだ。その時は大変でも、やりおえた後は印象深いものになっていると思うから。

- ・どんなことを学びたいか、最初に学生に聞いてみるのも一案かと思う。
- ・もっとVTRを取入れればいい。
- ・テキストが難しかった。
- ・美術鑑賞の機会を増やすべきだ。

というように、グループ発表を積極的に支持する意見と、VTR、美術鑑賞といった視聴覚教育部分を増やすとよいとする意見が多かった。その他、以下のようなコメントもあった。

- ・実際にアメリカに住んだことのある人を招いて、話を聞き、質疑をする。
- ・「アメリカの文化」をやってから、研修旅行に行きたかった。
- ・今のままのやり方でじゅうぶんである。

最後の問いの自由な感想に関しては、担当教員に対する私信が多かったので、ここでは省略するが、グループの研究発表など勉強は大変ではあったし、想像していたものとはかなり違う講義展開だった、としながらも、最終的には満足感を表明した学生が多かった。

以上が、学生に対するアンケート調査の結果である。

## 6. おわりに—これからの「アメリカの文化」—

学生のコース評価から、現在の短大生の文化観が浮き彫りにされた。学生は文化を、より広義に生活様式、ウェイ・オブ・ライフとして捉えたいという希望が強いのが大きな特徴の一つであろう。第二次大戦後の日本の暮しの中で「文化」の意味するところは大きな変容をとげ、アメリカからの影響を強く受けるようになった。この新しい概念としての「カルチャー」は、生活様式、あるいは生活文化を指すもの、とされる。<sup>9)</sup>そうした環境のなかで成長した学生達が、他国の（この場合、アメリカの）生活文化や生活様式に関心を寄せるのは、当然—ことなのかも知れない。

そうした学生たちの期待に注意をはらい、又今後のコース・デザインに反映させることに留意しつつ、あえて「アメリカの文化」では、そうした生活や社会の表層を支えるアメリカ社会の構成や価値に目を向けさせることを今後も主眼にするつもりである。

過去2年間、「はじめに」に述べたような「総合研究としてのアメリカ研究」の「一人の専門家が複数の学問方法を駆使し、或いは、複数の異な

## 短期大学における「アメリカの文化」教授法に関する一考察

る学問分野の専門家が協力して、アメリカ文化に関する単一のテーマを研究し、その論議を集約して総合的な研究、教育を行う」場合の、いわば前者の手法を用いたことになるが、今後は、できれば前者、後者の中間的、または複合的性格のカリキュラム開発の可能性の追求も検討の余地があるかと思われる。なぜならば、

「アメリカ研究は未だ流動的狀態にあり、これこそが活力の存続する状態だと言い換えてもいい。もしその解答がこぎれいにまとまり、方法論が画一的になり、カリキュラムが静止するようなことになれば、アメリカ研究は議論の余地ない教育上の不動の地位を確立することになるではあろうが、それと同時に皮肉にもその存在理由はなくなってしまふであらう。」<sup>(10)</sup>

という1975年のライオネル・D.ワイルド (Lionel D. Wyld) の考えは、この分野の持つ特質を言い当てているし、アメリカ研究のいかなる主題も、今日的意義を常に問われることを考えれば、アメリカ研究を学ぶ者は、たえず試行錯誤を繰り返しながら進む以外にないであらう、と考えるからである。

(注・参考文献)

(9) 森本哲郎、「文化異種論はどこから来るか」

「無限大」No.86. 1990年冬、pp.102-107.

(10) 「総合講義 アメリカ」p.17.

「アメリカの文化」学年末アンケート

1990年12月13日

一年間、アメリカの文化の諸相を学んできたわけですが、ここで一年をふりかえてみたいと思います。下の問いに答えて下さい。

1. あなたは何班でしたか？ 1-2-3-4
2. 4月に講義が始まる前、あなたはアメリカの文化のどのような側面を学びたいと思っていましたか。

[前期]

3. アメリカンセンター図書館の見学について。 1-2-3-4-5  
(1または2にまるをつけた人のみ)  
どの様に役だったか下を書いて下さい。

4. 「アメリカの地理と自然」について。  
講義の内容は・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5  
その他コメントがあれば書いて下さい。

5. 学生の研究発表について。
  - a) 4つの班にわかれたのは・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
  - b) それぞれの班に割り当てられたテーマは・・・・ 1-2-3-4-5
  - c) 分量的には・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
  - d) 各々の発表についてレポートを書いたのは・・・・ 1-2-3-4-5
  - e) どの班の発表が一番よかったですか・・・・ 1-2-3-4  
(自分の班もちろん含めて)

- f) 自分の分担範囲を調べるのに、どのような参考資料を使いましたか？
- g) その参考資料は、どこで見つけましたか？
  1. 短大図書館
  2. アメリカンセンター
  3. 書店
  4. その他(具体的に)

その他学生の研究発表についてコメントがあれば書いて下さい。

短期大学における「アメリカの文化」教授法に関する一考察

[後期]

6. 9月の芸術月間について。

- ジャズのVTR 鑑賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
- チャップリンの「独裁者」鑑賞・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
- アンドリュウ・ワイエス展見学・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
- 全体として・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
- その他コメントがあれば書いて下さい。

7. 「アメリカの教育」について。

- 各班に分かれて翻訳したのは・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
- おもにアメリカの公教育の歴史と制度を
- 学びましたが、その感想は・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
- その他コメントがあれば書いてください。

8. 「移民の国アメリカと移民の同化のプロセス」について。

- 講義内容は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
- 梅本・斉藤両嬢による「エリス島物語」は・・・・・・ 1-2-3-4-5
- その他コメントがあれば書いてください。

9. 「アメリカの女性と職業」について。

- 講義の内容は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5
- その他コメントがあれば書いてください。

10. 一年間アメリカの文化を学んで、あなたの質問2. で希望していたことはかなえられたでしょうか？・・・・・・・・・・・・・・・・ 1-2-3-4-5

11. 今後の学生のために、「アメリカの文化」に対する提言、意見など(こんなことをやってみたかった、とか)がありましたら書いて下さい。

12. 最後に全体について、振り返ってみての自由な感想を書いて下さい。

吉 田 かよ子

A View on Junior College Education and the Teaching of American Culture Studies

Kayoko Yoshida

**Abstract**

The objectives of this paper are twofold: first, it briefly looks at the development of American Studies as an academic discipline in Hokkaido and how Hokusei Junior College has developed its own American culture course starting in the academic year of 1979. After reviewing the first ten years of its development, the school sought a new approach with a new instructor. Her teaching method during the period of 1989–1991 academic years is detailed in the first half of the paper.

Second, the results of the course evaluation by the students in the American culture class, conducted at the end of 1990, are presented. The evaluation consisted of both objective and subjective questions. It is revealed that there is a discrepancy between what the instructor wanted to teach in the class and what the class wanted from her: students expected to learn more about the American way of life, while the instructor intended to cover a wide spectrum of cultural expressions, as well as fundamental values being manifested in the American society. The result also revealed, however, that the students were pleased with a group research and presentation method employed in the class.